

症例報告

特異な形態を呈した AFP 産生胃癌の一例

福良 巖宏 西山 徹 村川 力彦
林 芳和* 谷 光憲* 久保田 宏

はじめに

α -fetoprotein (以下 AFP) は肝細胞癌や胎児性癌の重要な腫瘍マーカーであるが、近年 AFP 産生腫瘍が消化器癌、特に胃癌で多く認められている。形態的には粘膜内病変もしくは粘膜より漿膜側へ浸潤する病変として認められる。しかし今回我々は粘膜下腫瘍及び著明な胃壁外進展を呈するという肉眼的に特異な形態を呈し、急な転帰を辿った AFP 産生胃癌を経験したので報告する。

症 例 56 才男性

主 訴 右下腹部痛

家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：平成 11 年 5 月下旬頃より右下腹部痛が出現し 5 月 31 日当院消化器内科受診。腹部触診にて右上腹部に腫瘍を触知。また血液検査にて Hb 6.9g/dl と高度の貧血を認めたため胃内視鏡検査施行。胃体下部から前庭部にかけて 5 cm 大の

Key Words : AFP、Alpha-Fetoprotein-Producing Gastric Carcinoma

A case of peculiar shaped Alpha-Fetoprotein-Producing Gastric Carcinoma.

Yoshihiro Fukura, Touru Nishiyama,
Tatuhiko Murakawa, Yoshikazu Hayashi*,
Mitunori Tani*, Hiroshi Kubota.

Department of Surgery, Department of
Gastroenterology*
Nayoro City Hospital.

名寄市立総合病院 外科, 消化器内科*

粘膜下腫瘍を認めたため入院精査となる。

入院時血液検査所見：RBC 349x10⁴/l Hb 6.9g/dl Ht 25.4% GOT 20 IU/l GPT 9 IU/l LDH 321 IU/l r-GTP 20 IU/l T-Bil 0.3mg/dl AFP 892.8ng/ml CEA 2.0ng/ml CA19-9 37.4ng/ml HBsAg(-) HCV(-)

高度の貧血および AFP の異常高値を認めた。

胃内視鏡検査：胃体下部～前庭部前壁大弯側に不整形潰瘍を頂部に認める粘膜下腫瘍がありそれに連続して V 型の隆起病変を認めた。Biopsy の結果は por 1 であった。

腹部超音波検査：肝と胃、大腸の間に ϕ 10cm の球状の腫瘍を認め一部胃前庭部と境界不明瞭な部位があった。肝内には明らかな腫瘍は認めなかった。

上部消化管造影：胃前庭部～体部大弯側に不整な defect 像を認めた。

腹部 CT：胃体部～前庭部と連続する ϕ 10cm の腫瘍が胃壁外に存在し一部肝とも境界不明瞭な部位があった。肝内に明らかな腫瘍は認められなかった。肝内胆管の拡張も認めなかった。

以上より肝に直接浸潤を呈する AFP 産生胃癌との診断にて 1999 年 7 月 1 日 D1 +LN7.8a, 10 郭清を伴う胃全摘術を施行し、再建は Roux-en Y 法とした。手術所見は ML Ant Gre typeV sT4 (肝 S5 被膜) sN3 sP0 sH0 sM0 stageIV であった。

病理組織学的所見：低分化型 腺癌 (por1) で pT2 (SS) pN3 (2, 3, 4d のリンパ節転移) CY1 ly0 v3 aw(-) ow(-) であった。増殖 pattern は hepatoid adenocarcinoma であり、また腫瘍細

胞の胞体の一部が AFP 免疫染色陽性であった。

術後経過：術後特に合併症なく退院。家族の意向で術後の化学療法は施行しなかった。AFP の値は一時 76.2ng/ml と改善したがその後再上昇し 1999 年 12 月 10 日には 2250.7ng/ml となった。その後閉塞性黄疸が出現し CT にて肝門部に局所再発を認め再入院。しかし内科的加療も効果なく 2000 年 3 月 4 日死亡転帰となった。

考 察

1970 年の Bourreille ら¹⁾ による血清 AFP 高値の胃癌症例の報告以来その認識の深まりとともに報告例が増えている。その頻度は全胃癌の 1.2～3.9% と低い。AFP 産生胃癌の臨床像は進行癌が多く高率に肝転移を来して予後不良である。肝転移率については 64.7%²⁾、68%³⁾ 等の報告があり肝転移が多い理由として (1) 単位面積 (体積) 当たりの細胞数が他の組織型に比べかなり多い (2) 静脈浸襲を来しやすい、ためとされている⁴⁾。



fig 1. 胃内視鏡検査

胃体下部～前庭部前壁大弯側に不整形潰瘍を頂部に認める粘膜下腫瘍がありそれに連続して 1 型の隆起病変を認めた

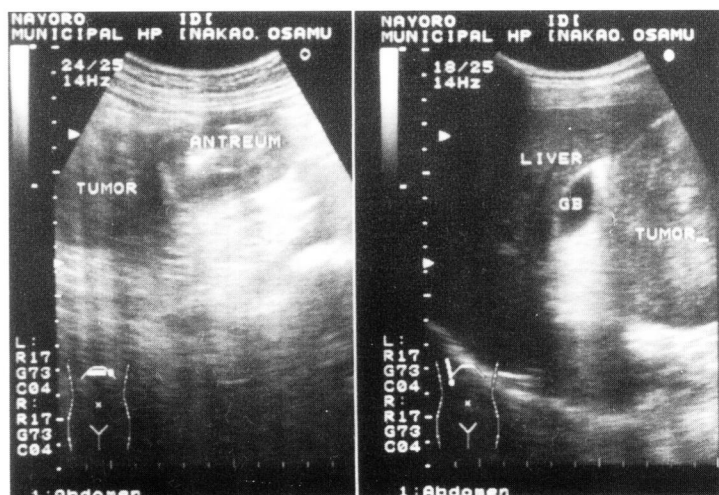


fig 2. 腹部超音波検査

肝と胃、大腸の間にφ 10cm の球状の腫瘤を認め一部胃前庭部と境界不明瞭な部位があった

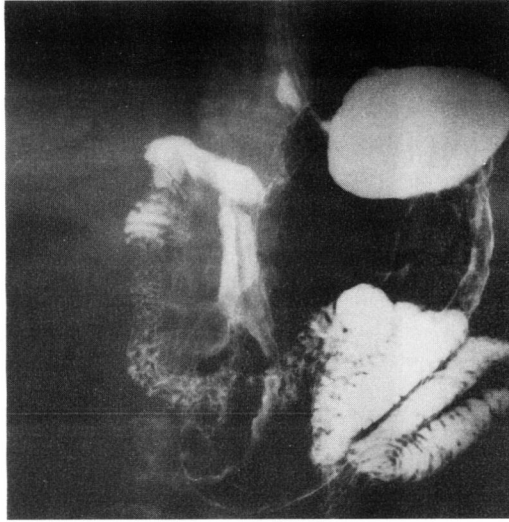


fig 3. 上部消化管造影
胃前庭部～体部大弯側に不整な defect 像を認めた

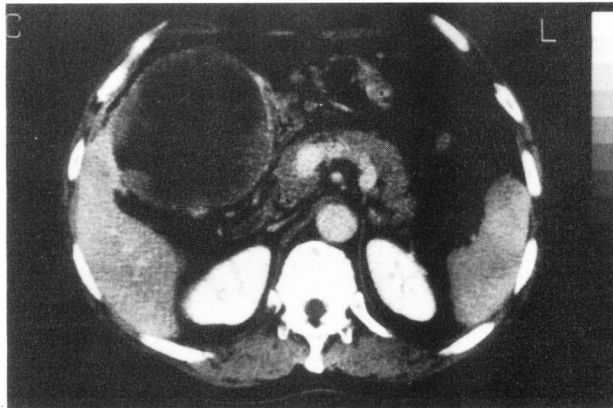


fig 4 a

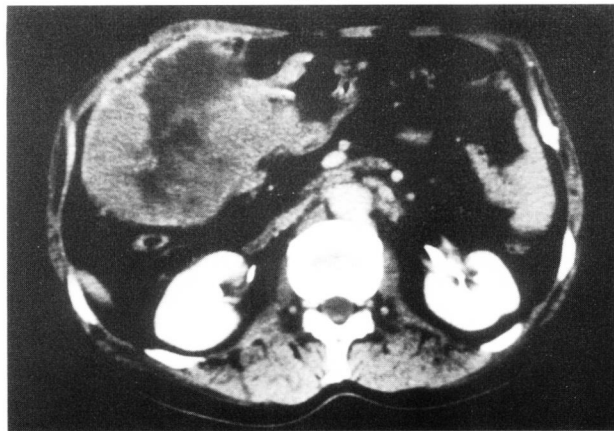


fig 4 b

fig 4. a b 腹部 CT

胃体部～前庭部と連続するφ 10cm の腫瘍が胃壁外に存在し一部肝とも境界不明瞭な部位があった

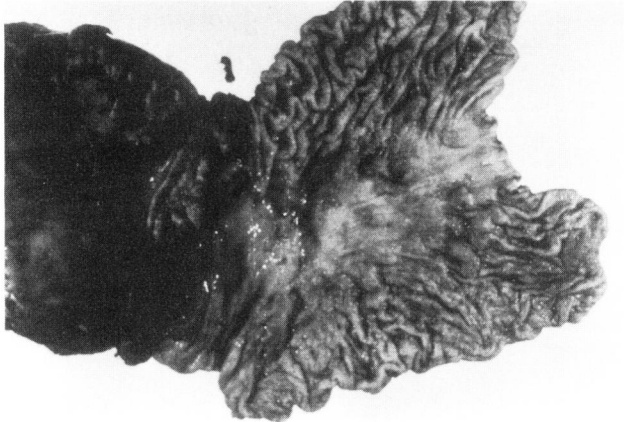


fig 5 a



fig 5 b

fig 5. 摘出病理標本

前庭部粘膜下腫瘍及び前壁大弯側に 8.0 x 7.5cm の粘膜下腫瘍様病変と V 型の腫瘍を認め、14 x 16 x 10cm の胃壁外の腫瘍が認められた

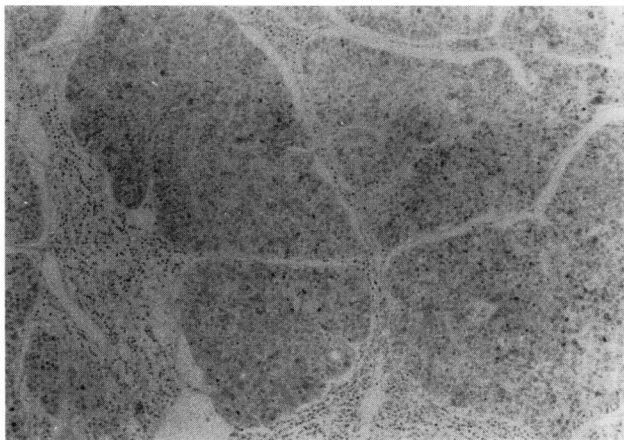


fig 6. 病理組織学的所見 (x 25. AFP 免疫染色)

低分化型 腺癌 (por1) の像を呈した。増殖 pattern は hepatoid adenocarcinoma であり、また腫瘍細胞の胞体の一部が AFP 免疫染色陽性であった

今回我々の症例も病理診断でv3と高度な静脈浸襲を来していた。また組織型については低分化型腺癌が多いという報告^{5) 6)}が多いが、今回我々の症例も同様であった。AFP産生胃癌の発現機序についても様々な研究が報告されている。AFPはその分子構造の違いにより亜分画に分けられ大別して(1)肝由来のもの(肝型)、(2)卵黄嚢由来のもの(yolk sac型)、に分けられる⁷⁾。櫻村らによるとAFP産生胃癌7例中5例はyolk sac型、2例が肝型であったと報告している⁸⁾。また病理形態学的な見知からも様々な報告がなされている。石倉らはAFPが高値を示し形態学および免疫組織学的に肝への分化を示す胃癌に対しhepatoid adenocarcinomaという概念を提唱した⁹⁾。今回我々の症例もhepatoid adenocarcinomaの像を呈していた。発生については多くのAFP産生胃癌は粘膜内腸型分化型腺癌として発生し、浸潤に従って胎生期腸管の形質を発現しAFP産生能を獲得する、と推論する説がある⁴⁾。しかし今回我々が経験した症例はその形態から恐らく最初は粘膜下腫瘍として発生し、その後胃壁外及び粘膜側へと進展したと推測され貴重な症例と思われた。

AFP産生胃癌は予後不良な症例が多い^{2) 3) 10) 11)}。ことから術後の化学療法が必要と思われる。近年肝転移率が極めて高いことより術後のCDDP, 5-FU等の肝動脈内注入療法が各施設で行われはじめたが¹³⁾、未だそのプロトコールは確立されていない。

結 語

今回我々は粘膜下腫瘍及び著明な胃壁外進展を示し肉眼的に特異な形態を呈し急な転帰を辿ったAFP産生胃癌を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

文 献

1) Bourreille J, Metayer P, et al : Existence d-alpha-feto protein au cours d'un cancer secondaire du foie d'origine gastrique. Presed Med 78 : 1277 - 1278, 1970.

- 2) 太田大作, 梶原義史, 原田英二, ほか : Alpha-fetoprotein 産生胃癌に関する臨床的, 病理学的検討. 日消外会誌 18 : 43 - 49, 1985.
- 3) 丁維光, 藤村昌樹, 平野正満, ほか : Alpha-fetoprotein 産生胃癌の多分化能を示唆する4例. 日臨外医会誌 52 : 794 - 799, 1991.
- 4) 高橋豊, 磨伊正義, 秋本龍一, ほか : 胃癌の肝転移 high risk 症例の臨床病理学的検討 - とくにAFP産生胃癌との関連について. 日消外会誌 17 : 1732 - 1736, 1984.
- 5) Koyama S, Ebihara T, Osuga T et al : Histologic and immunohistochemical studies of alpha-fetoprotein (AFP) producing gastric carcinoma. Gastroenterol Jpn 22 : 419 - 423, 1987.
- 6) 丸山道生, 北村正次, 荒井邦佳, ほか : 低分化型充実性胃癌の臨床病理学的検討. 癌の臨 35 : 905 - 911, 1989.
- 7) 金子道夫, 澤口重徳, 土田嘉昭, ほか : 各種腫瘍マーカーによる診断技術の進歩. 小児外科 18 : 57 - 64, 1986.
- 8) 櫻村弘隆, 下田忠和, 池上雅博, ほか : AFP産生胃癌の形質発現に関する検討. 日消病会誌 92 : 751 - 760, 1995.
- 9) Ishikura H, Kirimoto K, Shamoto M, et al : Hepatoid adenocarcinomas of the stomach. Cancer 58 : 119 - 126, 1986.
- 10) 稲田高男, 井村穰二, 尾形佳郎, ほか : Alpha-fetoprotein 産生胃癌に対する臨床病理学のおよび増殖活性についての検討. 日消外会誌 26 : 979 - 983, 1993.
- 11) 安永昭, 松本興三, ほか : AFP産生胃癌の1治験例. 消外 14 : 109 - 113, 1991.
- 12) 小松俊一郎, 早川直和, ほか : Alpha-fetoprotein (AFP) 産生胃癌の1例. 日臨外医会誌 52 : 583 - 586, 1991.
- 13) 久米川浩, 田中裕穂, 金澤昌満, ほか : 当院におけるAFP産生胃癌8例の臨床病理学的検討. 日臨外医会誌 58 : 810 - 814, 1997.